

クラブライフの提案

鴨川グランドホテルの鴨川リゾートクラブ「ジャイロ」

目次

「ゆったり」「のんびり」

1:【どこにでもある海岸とホテルの組合せなのだが…】【鴨川グランドホテルの表情】

平凡な海岸に飽きずに訪れる客が尽きない原因は、「ゆったり」かまえている施設の表情か…

変革のキーワードは進駐軍のサーファー

2:【安房鴨川の吉田屋旅館のこと】【吉田屋旅館が鴨川グランドホテルになるには】

シーワールドや菜の花は咲くにしても、集客可能なこれといった特色が…。戦前からの人気に進駐軍のサーファー、そして変革者の登場

安定へのランディング

3:【タワーを産んだ90年バブル】【「台風一過」の静けさ……！】

先代はハワイをベンチマークに船出、バブルに遭遇、当代がなんとか切り抜けた…。

変革促すもうひとつのキーワード 女流情熱俳人・鈴木真砂女

4:【旧吉田屋旅館女将を出奔した俳人・真砂女】

好きな人につくす喜びゆえに、私は活きた人生を送っています…

5:【鴨川シーワールド】

幼稚園の先生のような従業員と屈託なくトレーナーと遊ぶ「海獣」

落ち着きとりもどした「海獣」たち

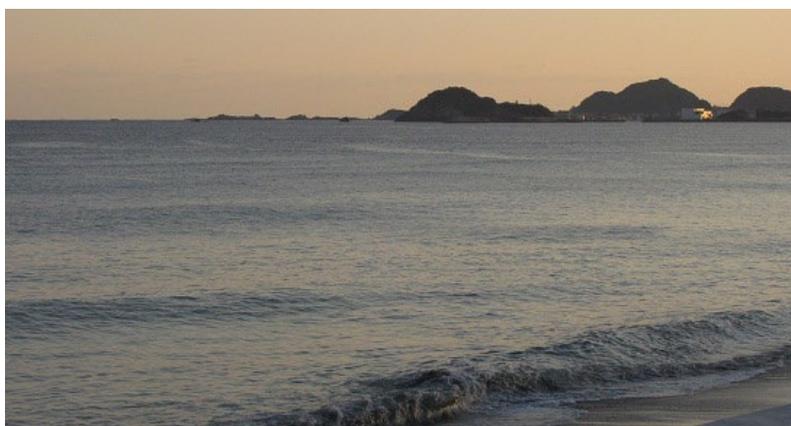
「ゆったり」「のんびり」 クラブライフのお誘い①

【どこにでもある海岸とホテルの組合せなのだが…】

このインフォメーションテクノロジーとグローバル化の時代、鴨川は日本ならどこにでもありそうな海岸である。この海岸に、なぜ、ここに鴨川グランドホテル(他に 33 階建ての鴨川グランドタワー)があり、そこに鴨川リゾートクラブジャイロが成立つのだろうか。

たしかに、後で紹介する鴨川シーワールドは面白い。好事家なら何回見ても飽きないであろうし、また、毎月イルカに会いに行くと心がさっぱりするという向きもあるかもしれない。しかし、それが主要な客層になって、クラブジャイロが成立しているとは到底思えない。

また、ホテルは 1965 年に建設したものを基礎に増床し、2006 年から 07 年に施設の大リニューアルを行って評判をとり、94 年にオープンしたタワーともども立派なものではあるが、単に施設を競うだけなら、同等程度のは、いろいろなサイトに多く存在するから、それが主な要因になって、滞在客がリピートするともいい難い。



しかし、クラブジャイロが成立つということは、鴨川グランドホテルやグループ内のホテルを飽きずに訪れ、宿泊する方々が居ることを意味する。その真因はどこにあるのだろうか。

【鴨川グランドホテルの表情】

宿泊事業で売上を作ろうとしたら、まずは頭数。たくさん入れるにはたくさん客室が必要だから、多額の固定資産をもつ。たいていはそれに見合う借入金を持つことになる。

その客室を埋めるには、大規模な会議や大団体宴会が最も手っ取り早い。今日は駐車場に観光バスが何台止まっているのか。まだ自動車のないころは、列車の駅から列をなして当館に客が訪れるかどうか。そのためには何をすべきか。代々の宿泊事業者はそれを考えてきた。

むろん、鴨川グランドホテルも同じことで、のどから手が出るほどに団体客は欲しいはずだが、それにしては「ゆったり」かまえている。少なくともそういう表情をしている。どこか余裕が感じられる。客が話しかければ、それに対応する余裕が従業員にある。そういうゆとりが、ひよっとすると、クラブジャイロのベース なのかもしれない。その余裕はどこから出てくるのであろうか。

むろん、「いらっしやいませ」からはじまる通り一遍の接客マニュアルではない。さりとして、リーガロイヤル式のホスピタリティマネジメントでもなさそうだ。現社長の鈴木健史氏は世界のホテルスクール、コーネル大学ホテル大学院を修了された方で、伺うと「自然体」と回答される。なんとかいう流行りのト

レーニングを徹底させる風ではない。ふと古参の方が「昔の吉田屋には全国の旅館経営者の子弟が働きに来ていた」と思い出ばなしをされた。



クラブライフのお誘い②

【安房鴨川の吉田屋旅館のこと】

シーワールドや菜の花は咲くにしても、どうみても安房鴨川に集客可能なこれといった特色があるとは思えない。

しかし昭和初期、安房はおろか全国に名だたる吉田屋旅館があったのだ。城郭としては小規模だが、城とも見まごう堂々たる純日本式三層楼（木造3階建て）に、次の間・両縁側付の通風と採光が優れた海を眺めるにふさわしい36の部屋を設け、安息所として訴求していたのである。



房総とは上総と安房のことで、この部屋から眺める北東の海こそ上総と安房の国境、そこから南西に見える太平洋は、類例のないほどに「澎湃」たる眺望なのだと訴求した。秩父宮など4皇族が来訪している。

実は、南房州鴨川海岸は東向きである。朝日が勝負の海岸であるから、日の出愛好家にはたしかに垂涎の的となる。当時は水着の走りで日傘は貴重品であった。地曳網はともかく、座敷から水着で海岸にお出かけになれるというのは、たいへんモダンなことであったし、麻雀やビリヤードのあった城郭まがいの3層楼は意外に開放的な空間であったと推定できる。

昭和初期といえば1930年前後、アメリカはモータリゼーションのさなかにあったが、おなじ高度成長国の日本ではまだ鉄道の時代であった。両国橋駅から西線の外房経由で4時間半で1.92円、東線の内房経由で4時間2.31円、東西一周は10時間3.93円（途中下車2回可能）。1923年の関東大震災以降、都内の西に住む人が多くなったが、主流の下町に住んでいたとしても、両国橋までの時間を考えると、かなりの移動時間である。

吉田屋旅館の2食付が3-5円、東京からカップルで出かけて2泊するとざっと25円くらい。山手線1周開通の1925年をもって東京に月給取りが定着したとすると、ひとつのめやすだった月給100円(初級将校の俸給)をクリアし、その上の階層にいるホワイトカラーなら、贅沢ではあってもまったく負担できないことではなかった。当時の一流旅館からベテラン女中さんが多数輩出したことは容易に想像できよう。

【吉田屋旅館が鴨川グランドホテルになるには】

実は、かなり珍しい例と思うのだが、(株)鴨川グランドホテルは1990年に株式を日本証券業協会に登録、現在も大阪証券取引所JASDAQ(スタンダード)に株式を上場していて(上場コード9695)、よって経営はかなりガラス張りになり、有価証券報告書からいろいろなことがわかる。「またどうして…」と尋ねると「先代の仕業」という。

先代とは取締役相談役の鈴木政夫氏(1925年10月生まれ現在86歳)で38歳で吉田屋旅館の社長に就任、2006年、81歳で相談役に引くまで頑張っていた。その沿革によれば、1965年、つまりは社長就任して2年後、40歳の折に「吉田屋旅館を閉鎖売却し、ホテルを新設して株式会社鴨川グランドホテル(千葉県鴨川市所在)に商号変更」とある。

鴨川の街なかにあった吉田屋旅館を同業者に暖簾ごと売却、防風保安林を超えて海岸側に新規開業を構想した。現社長の健史氏は若干8歳。いうまでもなく地元の人々は啞然としたろうが、ご本人は成算で胸がいっぱいであったに違いない。



想定する理由は2つ。ひとつは、この南房州安房海岸は、終戦後進駐したアメリカ軍の兵士にとってサーファーの好適地であったこと、吉田屋旅館は彼らの宿泊施設となり交流が生まれたこと、そして日本サーフィン発祥の地になっていったこと、ちなみに66年7月11日に第1回全日本サーフィン大会が開催された。そして特徴のない鴨川海岸はリゾートに変貌する大変な契機をつかんだのである。先代政夫氏がこの予兆に気付かないはずがない。そしてアリューシャン列島付近に発生した低気圧が産みだす世界最高の波がハワイ・ノースショアにあることも知る。政夫氏のハワイ通いが始まり、リゾート経営の波に乗ることを会得したというべきであろう。

ハワイもまた右上がりであった。ワイキキのベッド数と航空旅客輸送能力はぴたり一致する。ジェット化とジャンボ化が旅客輸送力を加速的に高めたかたである。

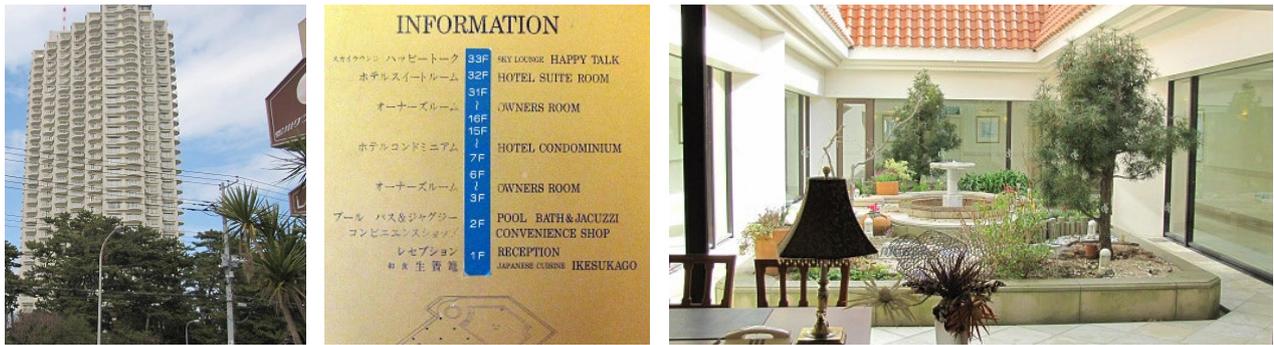
クラブライフのお誘い③

【タワーを産んだ90年バブル】

鴨川グランドホテルはハワイをベンチマークにハワイ風を打ち出したといってよい。何もハワイアンで埋め尽くさなくても、もともと吉田屋旅館には開放的な雰囲気があったから可能であった。女中さんはじめスタッフにはさ

ほど抵抗がなかったのであろう。昔の旅館の接客はホテルにも受け継がれた。しかし当時の日本のリゾート市場は皆無に近い。それでも観光もリゾートも一緒くたになって売り上げに貢献した。

想うに先代政夫氏の40歳から65歳までは、日本経済も大方右上がりであった。ことに40歳台の高度成長期、プラザ合意後の60-65歳のバブル経済期はイケイケの環境だった。先代の海岸進出は大成功だった。その勢いで、山口・西長門にホテルを取得、東京都内やシンガポールやオーストラリア・アメリカにレストランを出店、1988年にはバブル絶頂期に大手ゼネコン鹿島と鴨川グランドタワーを構想(事業規模200億円?)する。



写真は左・タワー 中・フロア構成 右・最上階のコンシェルジェ

現社長の健史氏は弱冠30前半。コーネルの成果でコメントしようにも、相手にしてもらえずまったく「カヤの外」だったという。それでタワーは滞りなく1992年に竣工する。後から見るとバブルの絶頂は1990年正月(ゴルフ会員権で同年4月)。都内超高額不動産の取引にも倦怠感が出ていた。それでもホテル旅館はあと4年続く。いわば得意の絶頂期の1990年に株式を公開している。

しかし90年代後半にかけて資産の値下がりが続く。銀座でさえ半値八掛け5割引以下になった。タワーを抱えた鴨川グランドホテルの苦悩もここからはじまる。先代は1996年から2000年まで会長を引いて相談役に後退している。メインバンクの千葉銀行から出向した幹部が超安定運転をはじめたであろう。東京や海外に展開したレストラン事業なども縮小撤退していく。



写真:左・タワー最上階ユニットのリビング部分 右・ホテル棟玄関

預託会員制システム・鴨川リゾートクラブ「ジャイロ」が発足したのは2006年5月のことである。この年に先代が再度相談役に退き、健史氏が代表権のある社長が就任した。ちょうど50歳に少し前のときであった。

【「台風一過」の静けさ……！】

現社長の経営がはじまって6年。90年バブルの嵐はほぼおさまって、静かな時期を迎え始めた。ホテルで感じる静けさは、こうした経過によるものであろうと考えた。

宮崎のシーガイアはこの10倍超の事業規模であった。当時日本のトップバンク第一勧業銀行はなぜ宮崎の辺地に億4ケタをつぎ込んだのかは、リゾートクラブ研究にとって重要な示唆を含むテーマである。およその見当はついているのだが、強引に蓋をかぶせてしまった。いずれ説明しなければならない。

ともかく鴨川グランドホテルもたいへんだったけれども、それに比べれば小さな台風でよかった。

クラブライフのお薦め④

【旧吉田屋旅館女将を出奔した俳人・真砂女】

鈴木まさ(真砂女)。1906年-2003年。吉田屋旅館の三女。日本女子商業(現嘉悦大)卒。久保田万太郎門下の女流情熱俳人として知られる。銀座1丁目の小料理屋「卯波」主人。1976年『夕螢』第16回俳人協会賞、1995年『都鳥』第46回読売文学賞、1999年『紫木蓮』第33回蛇笏賞。著書に『鈴木真砂女句集』角川書店、丹羽文雄の『天衣無縫』、瀬戸内寂聴の『いよよ華やぐ』のモデルになった。

…このように描けば、大旅館の文学好きのお嬢さんがプロの俳人になって結構なこととなるのだが、この吉田屋の三女はなかなかの利かん気で向こう意気がとよかったようだ。「恋に忠実に生きた人生を俳句を通して表現」というのが当たっている。



以下、若干の重複はご寛恕を乞い、その経過を記しておこう。

1927年: 恋愛結婚で日本橋の靴問屋の次男と所帯を持つも、次男氏は賭博に夢中で疾走。1女(後の文学座演劇部所属の女優本山可久子)をもうけるも離縁。実家に戻る。

1934年: 実姉急逝。実姉の良人と再婚。吉田屋女将に就任。

1936年: 宿泊客の海軍士官と恋愛。ともに既婚者どうし。出征する彼を長崎に追って出奔するも戦地に行く彼と別れ帰郷。俳人大場白水郎(後述久保田万太郎と府立三中・慶大文同期)主宰「春蘭」の会員になる。

1947年: 久保田万太郎の「春燈」に入門。

1957年: 離婚し吉田屋を出奔。銀座1丁目に「卯波」開業。カウンターが9席、小部屋2つの小料理屋。保証人は当時売れっ子作家の丹羽文雄。小説家や俳人・出版関係者が彙員にした。

(この頃、後の吉田屋社長の鈴木政夫は32歳ということになる)

1959年: 丹羽文雄の小説「天衣無縫」のモデルに。

(1965年、吉田屋社長鈴木政夫、社長就任2年後、吉田屋旅館を閉鎖売却し、ホテルを新設して株式会社鴨川グランドホテルに商号変更)

1976年: 第16回俳人協会賞。

1977年: 件の海軍士官死去。「計40年つきあいました。彼が亡くなるその日まで。最後は看取れませんでした」

1995年: 第46回読売文学賞

1999年: 瀬戸内寂聴の小説「いよよ華やぐ」のモデルに。

2003年: 真砂女没。「卯波」は店を移動して、令孫が経営。クラブジャイロの会員は優待があるとか……。

なお、鴨川グランドホテルの地階に「[鈴木真砂女記念館](#)」がある。本記念館にある写真を拝見していると、晩年

の雰囲気は、落ち着いた、充実した人生であったと思われる。その記念館の雰囲気である。

また、先代が、当時繁盛店だった市内の旧吉田屋を売却(今流なら M&A)して、荒野の海岸に新規開業を企図した動機は、この女流情熱俳人の存在と無関係ではなかろうと推察できる。

したがって現社長には否応なく後始末業務が課せられた。なかなか興味深い一族である。

クラブライフの誘い⑤

【鴨川シーワールド】

鴨川シーワールドの従業員の表情はまるで幼稚園の先生のようなものである。いま、経営にあたるグランビスタホテル&リゾートが企業再生支援機構の支援を受けて再生中だから、いろいろ難しい局面なのであろうが、子供たちとの接客に屈託がない。イルカやアシカなどの展示飼育、シャチの飼育調教、各種パフォーマンス(ショー)がある。こちらのほうは動物学や獣医学や水産学の総合的成果に、日々の厳しい実務が加わって形成したのであろう。この施設を背景にした学位論文がいくつかできて不思議ではない。パフォーマンスの主演は魚類ならぬ「海獣」。トレーナーを乗せて運ぶシャチはよほどこのレディが好きなのであろう。海獣の割におおらかにみえる。そこに人気があるのかもしれない。



ともかく用意されたパフォーマンスをプログラムどおりに観覧すると半日が過ぎてしまう。入園料 2500 円は決して安いとは言えないが、海獣たちの食事は合計日に 1 トン以上とのことで、まずは許容の範囲であろう。

この施設がなぜ安房鴨川にできたのか。サーフィン発祥のゆえであろうか。考えてみれば不思議だ。いまとなっては創業者の八洲観光開発株式会社の実態がわからない。ほじくりだせば面白そうな話が詰まっているかもしれない。

それを買収した当時の三井観光開発。その全身は北海道炭礦汽船(以下北炭)が 1958 年に関係会社として設置した北海道不動産(62 年に商号変更し北炭観光開発株)で、いまのグランビスタホテル&リゾートである。この経過は「日本観光史: 会社編」に詳しく、丹念な年表の他に、冒頭で[札幌グランドホテルが絵葉書で紹介](#)されている。

北炭といえば萩原吉太郎(1902-2001)。慶大理財出身だが非常に成績がよかったという。三井合名に就職し、1939 年、つまりは 37 歳のとき北炭に転職。私淑していた島田勝之助(三井合名常務理事から北炭会長)に殉じた形になる。

北海道は明治維新のときから三井の牙城だった。北炭の創業は 1889 年北海道炭礦鉄道(1893 年に北海道炭礦汽船に商号変更)であった、もともと政府からの鉄道払下げ受け皿会社として設立された。幌内炭鉱・幌内鉄道(幌内-小樽間)・幾春別鉄道(幌内-幾春別間)を運営していたが、鉄道国有法に伴い 06 年に国に売却された。

終戦後三井財閥は解体。北炭の関係会社北炭観光開発(株)が後(71年)に三井観光開発を名乗れたのはこの縁に拠る。47年北炭常務、55年社長。エネルギー革命で石炭産業が斜陽、かの三井三池争議が53年と59-60年に起きている。それで北炭は北海道不動産を軸に、宿泊やゴルフ場事業の直営や経営受託に進出、M&Aを繰り返し成長した。この鴨川シーワールドもその一端である。



ただ、萩原は千葉の松戸・小金の生まれである。小金と鴨川はだいぶ離れてはいるが、あるいはひょっとしたら鴨川グランドホテルの先代も影響を受けたかもしれない。また、内房の東京ディズニーランド(オリエンタルランド)や京成電鉄は三井の色彩が残る。

萩原没後、むりな投資が露出、また三井との縁も薄くなり、2007年、三井観光開発(株)が(株)グランビスタ ホテル & リゾートに商号変更、それに前後して、施設名から三井のブランドが外れていった。三井住友銀行としても引導を渡すべく2011年に企業再生支援機構に企業再生の支援を申請し、2012年2月に支援が決定した。

鴨川シーワールドが萩原氏の事業の傘下に入ったことがトクだったかどうかはわからない。しかし支援機構の支援期間は3年間、これで道筋がついた。鴨川シーワールドの海獣たちはやっと落ち着きを取り戻し、屈託なくトレーナーと遊べるのではなかろうか。

